

A ñ
é ß

STARTER STORY ・ JAPANESE ・ B1

はじめてのアルバイト

はじめてのアルバイト

大学一年生の悠太は、四月から駅前の小さな定食屋でアルバイトを始めた。初めてのアルバイトなので、前の日の夜はなかなか眠れなかった。店の名前は「ふじ食堂」という。

店長は六十歳くらいの女性で、みんなから「ふじさん」と呼ばれている。「難しいことはないよ。元気にあいさつができれば大丈夫」と、ふじさんは笑って言った。悠太は少しだけ安心した。

最初の仕事は、皿を洗うことと、テーブルをふくことだった。簡単そうに見えたが、昼の時間は忙しくて、皿はどんどんたまっていく。悠太は必死で手を動かした。

一週間がたつと、注文を取る仕事も任されるようになった。「いらっしやいませ」と言う声が、まだ少し小さい。ふじさんは「もう一度」と言って、大きな声で見本を見せてくれた。

ふじ食堂には、毎日来る客が何人かいる。いちばんよく来るのは、白い帽子をかぶったおじいさんだ。おじいさんはいつも窓際の席に座って、さばの味噌煮定食を頼む。

ある日、悠太は注文を間違えてしまった。さばの味噌煮ではなく、しょうが焼きをおじいさんの前に置いてしまったのだ。悠太の顔は真っ赤になった。「すみません、すぐに作り直します」

ところが、おじいさんは笑って首を横にふった。「いや、これでいい。たまには違うものも食べてみるよ」そして、本当にしょうが焼きをおいしそうに食べ始めた。

仕事のあと、ふじさんは悠太にお茶を入れてくれた。「間違えたことより、そのあとにどうするかが大事なんだよ」とふじさんは言った。悠太はその言葉を心の中で何度もくり返した。

それから悠太は、小さなノートをいつもポケットに入れておくことにした。客の好みや、よく出る注文を書いておくためだ。「窓際のおじいさんは、ごはん少なめ」「火曜日の夫婦は、お茶を二回」。ノートのページは少しずつ増えていった。

五月になると、悠太は店の仕事にずいぶん慣れてきた。声も大きくなったし、注文も間違えなくなった。ふじさんは「悠太くんがいると助かるよ」と言ってくれる。

ある雨の日、いつものおじいさんが来なかった。次の日も、その次の日も来なかった。悠太は窓際の席を見るたびに、少し心配になった。「風邪でもひいたのかな」

一週間後、おじいさんはやっと店に現れた。少しやせたように見えた。「入院していたんだよ。大したことはないけどね」おじいさんはゆっくり窓際の席に座った。

悠太は厨房のふじさんに小さな声で聞いた。「ごはん、やわらかめにできますか。それから、少なめで」ふじさんはうなずいて、「よく覚えていたね」と言った。

さばの味噌煮定食を運ぶと、おじいさんは驚いた顔をした。「ごはんの固さ、ちょうどいいね。よくわかったね」悠太は少し照れて、「いつもありがとうございます」と答えた。

帰り道、悠太は自分のノートを開いてみた。小さな字がもうたくさん並んでいる。ただの皿洗いから始まった仕事が、いつのまにか大切なものになっていた。

夏休みには、もっと働く時間を増やすつもりだ。「料理も少しずつ教えようかね」と、ふじさんは言っている。悠太は次の土曜日が来るのが、今から楽しみだ。

OQOU STARTER LIBRARY

This story is from oqou's free starter library, graded at B1 for Japanese readers.

Read it interactively in the oqou app: tap any word for an instant translation, listen with natural narration, and carry your saved vocabulary into every story you read next.

oqou.app

[Download oqou on the App Store](#)

oqou •